

42473

教科書文庫

4
810
42-1941
20000 35714

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

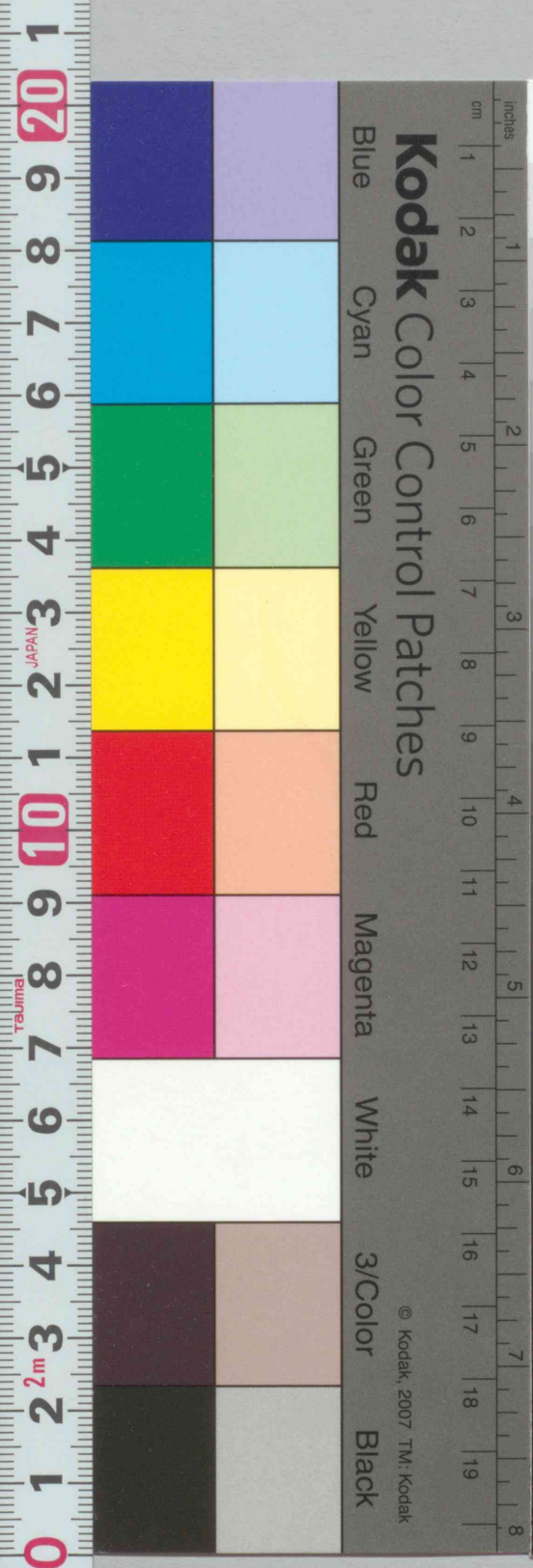


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Ka14
資料室

女子用
東西遊記常山紀談鈔

教科書
42
200



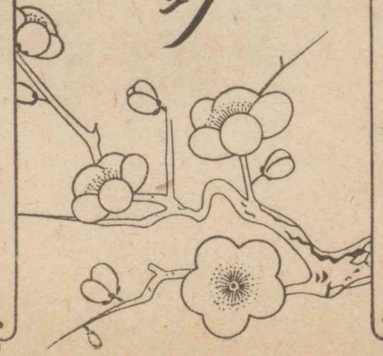
教科書文庫
4
810
42-1941
2000035914

濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高 日一十月二十年六十和昭

東京 光風館藏版

女子用
東西遊記常山紀談鈔

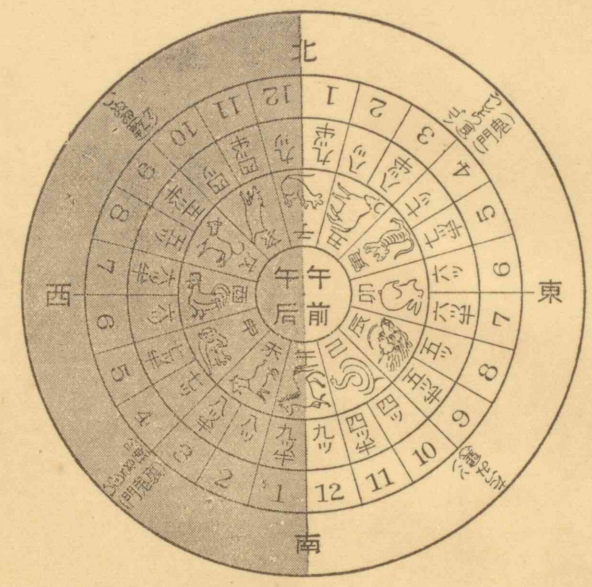
金子彦二郎編



資料室

375.9
Ka14

支干・行五 位方・時



五行	水 金 土 火 木				
	の と	の と	の と	の と	の と
十干	乙甲	癸壬	辛庚	己戊	丁丙
十二支	亥戌	酉申	未午	巳辰	卯寅 丑子
配	丁丙	乙甲	癸壬	辛庚	己戊
當	己戊	丁丙	乙甲	癸壬	辛庚
表	亥戌	酉申	未午	巳辰	卯寅 丑子
	癸壬	辛庚	己戊	丁丙	乙甲 癸壬
	亥戌	酉申	未午	巳辰	卯寅 丑子
06				61-甲	子



はしがき

一 本書は、最近文部省より發令された改正國語科教授要目の趣旨に準據し、高等女學校第二學年の國語科講讀の教科用書に充てんが爲に、新に鈔録編纂したものであります。

一 本書は、特に日本國民たる青年女子の心性陶冶の爲といふ獨自な立場から、それに最も適切なりと信ぜられる内容と文品とを有する優秀篇のみを、嚴選し拔萃し輯録したものであります。

一 私共の敬愛する祖先の手に成つた近世以前の名著國文をば、稍まとまつた形で教授することは、日本精神の發揚品性の陶冶國語愛の精神涵養上に頗る有効な營であると知りつゝも、其の講讀の爲に割愛されてゐる時間が僅少なことはこれ亦已むを得ないことであります。其の僅少な時間をば最も有効に活用

はしがき

して、所期の目的を達する爲には、其の對象たる青年女子の心性並に學力に最も適切な教材をば、これを適量に提供することに在るのであります。

一 右の意味合から、本書では、原著中、時代的色彩や、作者の個人的特徴の最も濃厚に含まれた、しかも平明温雅な精粹のみをば、繁多ならぬ分量に於て鈔出することに、特に教育的良心を以て細心な注意を加へた積りであります。

昭和十三年秋

編者しるす

女子用 東西遊記常山紀談鈔

目次

東西遊記

解題

一	屋氣樓	一
二	親不知	四
三	藤樹先生	八
四	金華山	一六
五	葡萄嶺	二二
六	善光寺	三五
七	諏訪湖	六六

目次

八 知らぬ火……………三三

九 魂 祭……………四〇

一〇 球磨川……………四二

一一 孝 行……………四九

一二 阿蘇山……………五一

一三 那智の瀧……………五五

常山紀談

解題

一 上杉輝虎平家物語を聴く……………五九

二 太田持資……………六三

三 上杉謙信鹽を送る……………六五

四 山内一豊の妻……………六六

五 森蘭丸の才敏……………六六

六 淺野長政の諫言……………七〇

七 小早川隆景の遺訓……………七二

八 家康へ諫言……………七四

九 松平信綱の恭敬……………七七

一〇 塚原卜傳の活眼……………七九

一一 小櫃與五右衛門……………八一

一二 稻葉一徹の文學……………八三

東西遊記

解題

作者 橋南谿、名は春暉、伊勢の人で、醫を業として官途にも就いたが、傍ら文學を嗜み、特に旅行を好んで、日本各地を漫遊した。著書には本書の外に隨筆、北窓瑣談もある。文化二年(三〇六五)五十三歳で歿した。

成立年代 著者が天明二年より三年にかけて、山陽道九州四國方面に遊んだ紀行を西遊記といひ、同じく四年から六年に亘つて、東海、東山、北陸などの諸道を漫遊した紀行を東遊記といふ。

内容 前記の旅行は醫學修業の爲で、此の方面に關する記事は別冊とし、其の外の記事を集めたのが本書で、東遊記、西遊記とも前篇、續篇各五卷より成り、到る處で見聞せる名所舊蹟の由來や傳説や、其の

地の歴史風俗習慣、其の他の奇事異聞、又は自分の經驗談等凡そ百六十種を收めて居る。當時に於けるそれ／＼の地方の狀況を知るには、極めて良い資料である。文章は平易率直、少しも技巧を弄せず、而も自由暢達の筆力には、一種言ふべからざる妙味があり、紀行文の模範とするに足るものと思ふ。



女子用 東西遊記常山紀談鈔

一 蜃 氣 樓

唐土の書物にも禮記に、蛤一名蜃、能く氣を吐いて樓臺を爲る又本草に、蜃は蛟の屬、氣を吐き樓臺城郭の狀をなす。蜃樓と名づけ亦海市ともいふ。

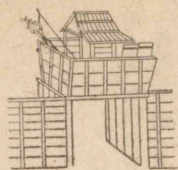
唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり。又海市ともいふ。海上に雲の如くに氣立ちのぼりて、樓臺城郭の形を現はし、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、是れ大海の底にある大なる蛤の、氣を吐きて空中に樓閣の形を現はすなりと。又蜃といふは、其の形龍の如きものにて、海中に住んで氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。色々の説あり。蘇東坡なども南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚だ珍しがりて、賞玩する事とぞ。

一 蜃 氣 樓

蘇東坡
中華民國宋代の
文豪

魚津
富山縣下新川郡
魚津町

櫓門



我が國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此の蜃氣樓は甚だ稀なり。唯越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞み渡りて、一面の鏡の打曇れるが如き日に、此の蜃氣樓を結ぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶ事あり。誠に唐土の人のいへる如く、海上に煙の如く雲の如く次第に結び來りて、遂には樓臺の如く、或は城郭の如く、人馬往來せるが如きも、歴々然として見ゆ。此の地に我親しく交りし宮島式部太夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初め幕を引けるが如くなりしが、しばらく見る間に、城郭の如く、矢倉、高塀やうのものも見え、矢間やまなどの如きものも見えしが、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうに見えき。夕暮に及び風少し出でたれば、漸々に消失せて跡方もなくなりしとなり。富山よりは纔に六里を隔てたる所な

糸魚川
新潟縣西頸城郡
の海に面する都
邑

れば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶも知れがたく、又結びたる時急に人して告げ知らすにも、其の間には消え失せて見るべからず。此の故に、魚津近所の海邊の人は、例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯遂に見ざる人多し。余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと人に勧められ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし頃は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せん事あまり永々しければ、残念なりしかども見ずして越後に越えたり。

越後の糸魚川にて、松山茂叔しゆくに此の事を語りしに、此の人も糸魚川の海中遙に山の出來たるを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて折々見ることなりといひし。と語られき。余始め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大洋にあることに、陸地近き入海にはなきことのやうに心得しが、魚津の地理を見

るにさにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向ふの七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風のごとくに見る魚津の海は、東よりの入海なり。海中より蒸し上る陽氣、向ふの山に映じて色々の形を見するなり。向ふに當なく、數百千里見晴したる大海にては、陽氣上るといへども、向ふの當無ければ映ずることなくして、人の目に見えがたしとぞ覺ゆる。伊勢の桑名の海にも、三十年五十年の内には、たま〜蜃樓を結ぶ事ありといふ。是も向ふに尾張・三河の山を受けてあるゆゑなるべし。又、安藝國にてもたま〜はありと言ふ。これも向ふに山あり。其の外の國にては、蜃氣樓を結ぶ事いまだ聞かず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべき事なり。

(東遊記卷之三)

二 親 不 知

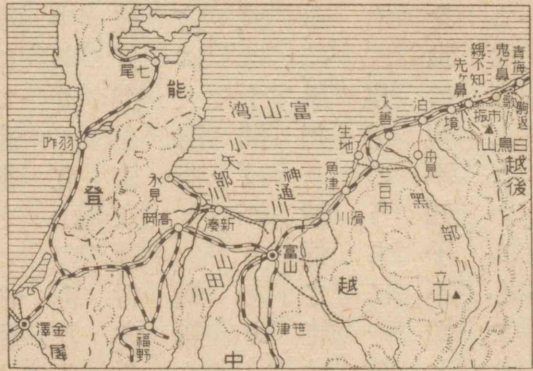
親不知
新潟縣の西端の
海濱凡そ六軒許
りの間の險難な
通行路
親不知地方

十間
約十八米
一町
約百十米

越中越後の境に親不知子不知といふ所あり。北陸道第一の難所として、普く人の知る所なり。越中立山の裾、北海へ張出したる所にて、市振といふ驛より歌といふ所までを山の下と稱して、二里半あり。立山の裾なる故に、斷巖絶壁にて路徑も附けがたき故に、波打際を旅人通行する事なり。一方は壁を立てたるごとき山、一方は大海なり。風無く波靜かなる日は、旅人通行する道幅七八間或は十間ばかりあり。又所によりて、半町一町もある所あり。然るに、風起り波荒き時は、直に彼の絶壁の所へ波打かけて、通路なし。右二里半のうちに、一箇所長さ五六町の間、別して道幅狭き所あるを、世に親不知子不知といふ。甚だ難所にして、親も子も思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其の間、絶壁の根に岩穴ありて、十間程づつ置きて其の穴いくつも有り。波の打寄する時は、通行の人此の穴へ走り入りて、波の引く時を見合はせて

二 親 不 知

走り過ぎ、又波來れば次の穴に入りてこれを避く。もし北風強きときは、數日を経といへども、通行ならずとなり。去々年も、越後の



親不不知附近

商人越中に越ゆるとて、此所を無理に通
りかゝり、中程にて波風殊に強くなり、件
の穴に逃入りたるに、穴際まで大波打か
けて、走り過ぐべき隙なく、八日が間其の
穴の中に居り、やうく波風静まり、命た
すかり、其の穴を出でたり。誠に其の間
の饑渴、心遣ひ、いふに詞なしと語れり。
波高き日無理に通るかゝり、穴中に避け
隠れて出づべき隙なく、二日三日穴に居
余が通行せし時は、雨天にて波風はさの
る人は年々多き事とぞ。
み強からざりしかども、上の山は傾くがごとく聳え、寄せ來る波は



越後 親不不知

越後

親不不知 安藤廣重筆

肩輿
肩で擔ぐ輿

足を引去れば、其の恐しき事今に忘れず。余が友富山の佐伯某此所を通りしには、其の身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて其の肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴に隠れ、走りぬけては、穴に隠れて、やう／＼に過ぎしと語れり。惣じて此の邊の人足は、波を避けて走ること妙を得たり。されば此の地の人夫大勢を召連れ行く時は、大抵の波風には滞ることなしといへり。

さて此の親不知を過ぎて、少し山の懷に人家ある所を歌村と言ふ。其の村を過ぎ、又波打際を行けば、駒返りと言ふ難所あり。此所は波風無きときと雖も、常に山の根へ波うちかけ、通路なりがたき故に、絶壁の中なか半かに岩を穿ちて細き路を附け、旅人通行す。其の間纔の所なれども、馬上なりがたき故に、駒返と名附く。馬は兩方の驛より牽き來り、荷物は其の纔の所を人夫にて送り越すことなり。歌村より一里半にして青海あそみといふ驛あり。此所は山下を通

りぬけて少し廣みなり。市振より青海まで四里の所難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ゆることなり難し。誠に一人これを守れば、萬夫も過ぐることも能はざるの要害の地なり。故に市振は御領所にて關あり、往來の人を改む。余、醫者にて惣髮なりし故に、別して丁寧に吟味ありき。誠にさもあるべし。他所と違ひ、一方は大海、一方は萬仞の高山南の方へ數十里連り聳えられたれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる所をいふべし。かほどの難所なれども、夏の頃天氣格別晴朗にして、風波靜かなる日は、道路に少しの高低もなく、絲を引きたるとき波打際の事なれば、難所とも知らず、唯風景のよき所とのみ思ひて通行する人多しとなり。

(同卷之四)

三 藤樹先生

小川村
滋賀縣高島郡
琵琶湖の西岸に
近い
王陽明
中華民國時代の
大儒
良知良能即ち知
行合一説を説い
た

先生は俗稱中江與右衛門といひて、江州大溝の在中、小川村の産にて、分部侯の領地の百姓なり。王陽明流の學者なりしが、其の德行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思はる。先年余聞きし事あり。尾州の一士人、用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村に有り



と聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、畑道なれば知れ申すまじ。案内して奉らん。とて、先に立ちて行く。程なく小き藁屋に至り、しばし待たせ給へ。とて内に入り、やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に、布の小紋の羽織を著たり。彼の士人驚きて、さて、丁寧なる男かな。墓だに教へ得さすれば満足なるに、と思ひもて行くうち、墓所に至りぬ。彼の農夫竹垣の戸を

開き、「いざ入りて拜し給へ」とて、其の身は戶外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め著せしは我が爲にはあらで、先生を敬するにてありけると心付き、さては汝は藤樹の家來筋の者にてやある」と問へば、さには候はず。されど此の村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざる無し。親を敬ひ子を親しむ事を辨まへ知りたるは先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからずと、我が父母も常々教へ候ひぬ」と語る。士人も、初めは唯なほざりに一見の心にて來りしが、此の農夫が様子を見聞するに、今更に心もあらたまり、懇に拜して歸りぬとなり。

其の後、余肥後にて村井氏に親しく交りしに、或日、村井、外より歸りて語りしは、さては今日は珍しき墨蹟を見たり。此の國の家老何某の方へ、近き頃江州より聳養子に見えしあり。其の方へ用事ありて行きしが、物語の序にふと思ひ出でて、そこの御里方の御領

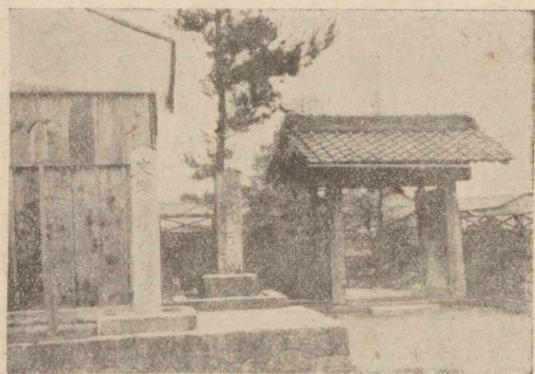
村井氏
村井中漸

分に中江藤樹といひし人ありし由、御存知にもや。其の手跡などは所持し給はずや」と語り出でしに、彼の人、座を改め、藤樹先生の御事は我が父祖以來尊敬いたし候ひて、老父我を愛するの餘り、遠方へかく參るにつけて、豫て祕藏の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申すべし」とて奥に入り、禮服に改め一軸を携へ出でて床にかけ、遙に引下りて拜せられぬ。其の尊敬かくばかりなれば、我も手洗ひ口漱ぎなどして拜してやみぬ。分部侯にありては、畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝこと、代々賢を愛し徳を敬ひ給ふことも有難く、又藤樹先生も眞の大儒なることも始めて知りぬ」とぞ申されし。

此の二事耳に残りあれば、此の度よき序なれば、墓にも謁し、講堂をも一見せばやと思ひて、大溝の東の加茂といふ處より南へ入ること八町にして、小川村に至る。農夫、老婆までも委しく道を教へ、

講堂
講義をせし場所
藤樹書院のこと

迷ふこともなくて講堂の前に出でたり。雨戸鎖しあれば、其の隣志村周助といふ醫者の許へ案内して、講堂を拜したき由申入るゝ



院書樹藤

に、まづ玄關へ上り給へ。といふ。草鞋がけなれば、唯假初に講堂の案内を。といへど、強ひて足そゝぎの水など持ち來るま、已むことを得ず草鞋脚絆など解きて玄關へ上るに、周助出迎ふ。四十ばかりの惣髪なり。茶煙草の世話も行届きたり。余講堂を拜見し、神主かみじゆをも拜したき由乞へば、周助奥に入り、禮服を著して、講堂の鍵を手に持ち、いざ、來り給へ。と引連れて行く。さて講堂を開きたるに、堂は茅葺にて、間數四間あり。書院南面にて十五疊、縁側あり。向ふと西脇に、押入あり。此の書

神主
神靈

朱子

中華民國宋代の

大儒

名は熈

白鹿洞は朱子の

再興せし學問所

相違の學風

朱子學と陽明學

との相違

前者は朱子の唱

へたもので格物

致知を基とし、

後者は王陽明の

唱へたもので知

行合一を主張し

た

釋菜

略儀を以て孔子

を祭る儀式

慶安元年

後光明天皇の御

代の年號

院、講場なり。其の次對客の間八疊に床あり。其の次十疊、其の次臺所なり。正面縁側の上に、藤樹書院といふ四字の額あり。分部昌命拜書とあり。十疊數の間に、朱子の白鹿洞の規則を板に書き懸けたり。さばかり相違の學風なるに、此の文を懸けられたるも殊勝に覺ゆ。押入の内に深衣を著せる繪像あり。釋菜せきさいの時の圖と言ふ。其の前に厨子あり。其の内に神主あり。上箱に、先生姓は中江、諱は原、字は惟命、願軒と號し、藤樹先生と稱す。慶安元年戊子八月廿五日卒す。邑の東北玉林寺に葬る。とあり。箱の内の神主、常法の如し。さて悉く見終り、周助宅へもどり、いかなれば、かく此の堂を司り給ふ。と問ふに、父祖代々門人にして、殊に昔よりかく隣家に住み、今にては先生の子孫も無ければ、かくは預り來れるなり。先生の歿後年已に久しけれども、其の餘教近郷に深く染み入りて、殊更此の小川村の百姓は、年若き者といへども毎夜集會し

河原市

滋賀縣(近江國)

高島郡新儀村安

井川の一名

大溝の北八軒

輕尻の馬

本馬の荷の半量

を一駄とする駄

馬の稱

榎木

滋賀縣(近江國)

滋賀郡和通村榎

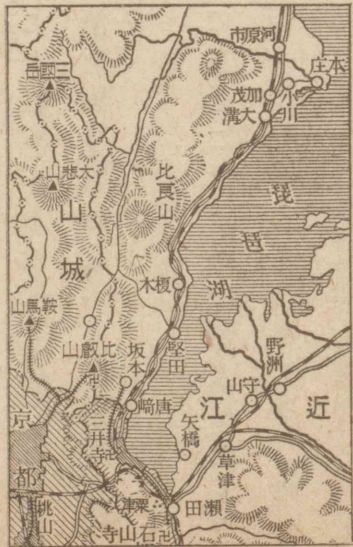
大津市の北十八

軒

て手習し、かりそめにも酒など打飲み、亂舞音曲などをすることな
く、まして博奕などはいふまでもなし。故に、いかなる輕き者とい
へども物書かぬものはなし。といふ。誠に此の邊の風儀、溫和淳朴
にして、見る所聞く所、感に堪へず、有難き事どもなり。前の尾張、肥
後の物語、相違なきこと知れり。

熊澤先生は其の門人なり。此の人、藤樹先生に従はれし初めを
尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、
江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬方は河原
市へ歸り、馬のすそを洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ
出でたり。取りあげ見れば、金二百兩あり。馬方大きに驚き、今の
飛脚の取忘れたるにこそはと思へば、そのまゝ榎木に走り行き、飛
脚の泊れる宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ其
の金を取出し返しけるに、飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、

悦びのあまり行李より別の金子十五兩取出して馬子に與へ、もし
此の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き
罪に到らん。されば、その高恩なか／＼言葉の盡くすべきにあ
らねども、先づ當座の御禮まで
に贈り奉る。と涙を流して悦ぶ。
馬方大きに驚きし顔色にて、そ
なたの金をそなたに取納め給
ふに、何の禮といふことあるべ
き。とて、手にだに取らず、いろい
ろにこしらへ言へども、さらに受けずして歸らんとする故、已むこ
とを得ず十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、つ
ひには金二步となし、せめてこればかりは我が心の悦びなれば受
け給ふべし。さなくては我が心も濟み申さず、今宵も寝ね難し。と



近附木榎・市原河

鳥目



禮を盡くし詞を盡くしいふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべき所をこれまで追ひかけ來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし。といひて、二百文にて酒を買ひ、其の家の人に振舞ひ、我も酔ふ程飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはすと問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。唯我が在所の近所に、小川村といふ所あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡くすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからずなどといふ事、

常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば取るべき理無しと心得しまでのことなり。と言ひ捨てて歸りぬ。



熊澤政禮 熊澤蕃山

飛脚はそれより京へ上り、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命いきのびて、各方にも對面すること成りぬ。とて、有りし次第をくはしく語るに、折節其の家の裏に、熊澤治郎八田舎より上り居て、學問修行最中の事なりしが、此の物語を聞きて、其人こそ誠の儒といふものなれ。とて、其の翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて、隨從を願はれしに、人を教へ申すべき程の學徳なし。とて、更に隨從を許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゞずみて歸らず。藤樹の老母、これを氣の毒がり、よし

や、先づ内へ入れ申せよ。」とありし故、否みがたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせられしよし。其の後、藤樹を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりと堅く辭し、門人熊澤といふものあり。御役にも立つべき者なり。とて熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。長物語なれど、藤樹先生の事蹟くはしく知らぬ人も多ければ、見聞き及ぶ所を書きつけぬ。江州に遊ぶ人は、必ず彼の講堂見るべき事なり。

(同卷之四)

四 金華山

奥州金華山は、日本に黄金の出で初し山にて、其の昔こがね花咲くとよみし所なり。其の他又日本東方の限にありて、景色無雙の地、實に仙境ともいふべし。仙臺より東の方に、東海廻船の入る大湊あり。石の巻といふ。頗る繁華の地なり。其の石の巻の渡波

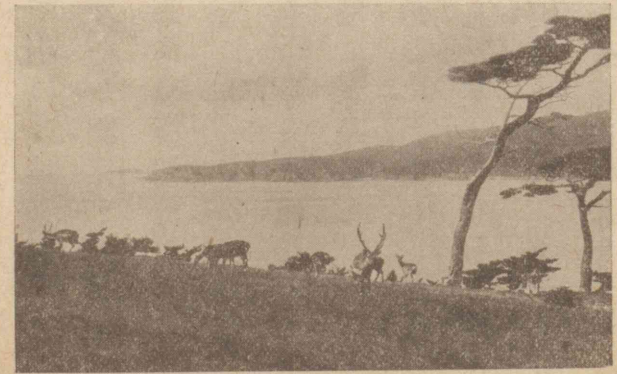
こがね花咲く
すめらぎの御代
榮えむとあづま
なるみちのくや
まに金花咲く
(萬葉集)
石の巻
北上川の河口
渡波
石の巻の東

山鳥
牡鹿郡鮎川の中

金華山附近



といふ所より、磯を傳ひ、山に登り、大きな峠を越え、行程十餘里にして、山鳥といふ所に至れば、船渡しせりの小家あり。金華山向ふに見えて、これ金華山への渡り口なり。晝より後は浪高くして渡りがたしとて、皆朝とく船を出して渡るとなり。其の渡り纔に三十町許にて、向ふの山手に取るやうに見ゆれども、追門おしもんのこと故に浪甚だ高く、大きに危き海なり。此の三十町許の間の中程に至れば、山の如き大浪來る。晴天無風の時と雖も必ず此の大浪は寄ることなり。此の浪を彼の地の方言に御殿隠かきこといふ。天氣靜かなる日は、此の大浪を一つ越えてすむことあり。又少し風波ある日は大浪を四



金華山

つも五つも越ゆることなり。此の所の船は常々此の浪を越ゆる事を覚え居る故、浪來れば其の浪に上り、浪引く時は其の浪につれて自由に船を操る。然れども他邦の人は、いかなる丈夫なる心の者にて、も此の危さに堪へかぬるなり。島には寺院一宇ありて、辨財天鎮座の山なり。絶頂まで四十八町といふ。島廻り、六町一里の詞にて三十四里といふ。峯上に權現の社あり。箱崎とて天女出現の靈窟もあり。峯を向ふへ越ゆる所に水晶石といふ有り。高さ數十丈、廻りも數十丈にして、全體六角の白石なり。明徹にすき透るといふにてもなし。然れども奇品なり。其の石上に一本の松自然に生じて、海風に多年もまれたれば、木立枝ぶり人作にて造りなせるが如く、景色たぐひなし。此の金華山は、山中皆黄金なりといひ傳ふ。げに今にても海砂皆金色に光り、波に映じていと見事なり。山中も岩石に金砂吹出でて、道路の間も皆金色に見ゆ。

權現の黄金を深く惜しませ給ふといひて、旅人取去る事を堅く禁ず。又歸路に船に乗らんとする時は、其の山中にてはきたりし草鞋を脱捨てて船に乗る事なり。是も草鞋に附きたる砂金を陸地へ渡すまじき權現の思召しゆゑとぞ。
(同卷之五)

五 葡萄嶺 たろげ

天明丙午三月十八日、余越後國平林といふ所を立出づ。早朝少し雪降る。夫より二里餘にて村上の城下に至る。此所の問屋にて、是より馬を借らんと言ふに、是より先は雪深く馬足立ち難しといひて馬を出さず。三月末の事なれば、いかに雪國なればとて、馬足の立ち難き程の事はあらじ。是は人馬不自由なる故、かくはいふなるべしと疑ひながら、せんかたなく歩み行くに、村上より一里、猿澤の驛の邊既に雪多し。それより又一里、鹽の町といふ驛にて

葡萄嶺

新潟縣岩船郡下
海府村の東



天明丙午

天明六年

村上

猿澤

塩の町

何れも新潟縣岩

船郡にあり

山形縣の境に近

い

養軒
橋南翁の弟子

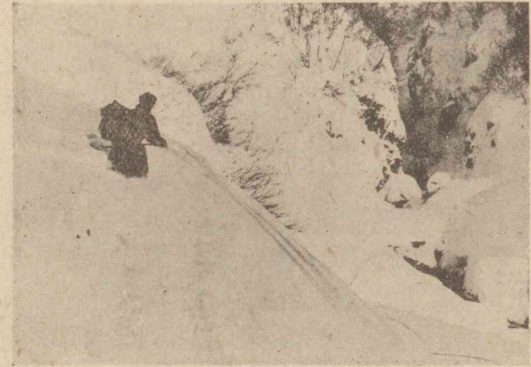
八ツ
午後二時頃

半道
半里のこと

女子用東西遊記常山紀談鈔

中食するに、其の家の老婆、是より先は雪甚だ深くしてたやすくは行き難し。今宵は此所に宿り給へ」といふ。養軒顔を見合はせて、未だ日中に至らざるに宿せよといふ、老婆の此の家にとめんと思ひていふなるべし。殊に天氣も晴れたり。此の先の葡萄の驛迄は纔に二里の道なれば、八ツ過ぐる頃迄には行著くべしと、嘲笑ひて出でたるに、誠に老婆がいへるが如く、鹽の町の出離れより雪殊に深く、山川道路唯一面の白雪にて、村離れ半道許はんみちに人の行通ひし跡もありて、目印もありしが、それより先は道筋もわからず、方角をも取失ひて、行くべき先をわかかねつゝ、迷ひ行くに、折々は雪を踏みぬきて川の中へ落入り、腰許も雪の中にあり。或は切り岸などの所に行きかゝり、雪崩れ落ちて深き所へこけ込などして、養軒と互に助け合ひつゝ、谷筋の平なる所を道なるべしと志して行く程に、谷川池澤ふけ田などの中へ落入りては、倒るゝ事數十度に及べ

り。されども積雪至つて深ければ、川の上といへど、身體全く落入ることなし。かく千辛萬苦して、纔に二里の場を半日かゝり、日暮



北國の雪

に至りやう／＼葡萄の驛にたどり著きたり。誠に老婆の詞に従ひ、鹽の町に一宿し、早朝の雪堅きうちに案内者をやとひ來らば、かゝる危き事には逢ふまじと後悔しながら、先づ恙なくて著きしを悦び、湯をつかひ、爐にあたり、寒氣を防ぐに、足より血の流るゝに驚き思へば、今日度度踏みぬき落入りし時疵附きたりしが、其の節は血も凍りて走らず、痛みをも覺えざりしが、今湯に入り、火にあたゝめて、初めて血の出でけるなり。其の疵の痕、今に黒く残れり。

さて此の夜つくづく思ふに、今日の所だにかくの如し。明日の道は名に負ふ葡萄峠にて、北地第一の雪所なれば、いかなる難儀にか及ばん。唯、早天雪凍りて堅き間に、案内者を雇ひ越すべしと用意して、十九日まだ明け果てぬより立出で、案内を先に立てて道はいそぐ。誠に聞きしに勝りて、數丈の積雪、山は白銀をもて作れる如く、樹木も見えず。されど案内者有れば道もたどくしからず、雪も凍りて落入るの恐もなくして、程なく頂に至れり。此所に矢伏明神とて神祠あり。此所は山の懐なる故にや、雪もや、少なく覺ゆ。神祠の後に巖穴あり、明神の住み給ふ所なりといふ。此の巖穴の上の方に甚だ高き絶壁あり。巖の高さ三十丈餘有りといふ。其の巖の邊に古木の杉數十本有るに、其の杉の梢やうく岩の半に及べり。此の邊は誠に唐畫を見るごとく、奇絶比類なし。

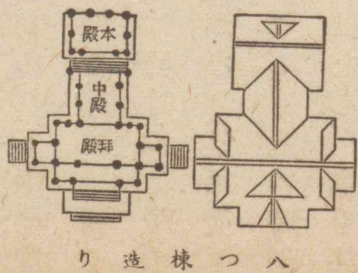
(東遊記後篇卷之二)

六 善光寺

善光寺
長野市の北部にあり



信州善光寺は格別の靈場なれば、世の尊信する寺にて、諸國より參詣の人甚だ多し。堂塔も廣大美麗にて、田舎には珍しき寺なり。本堂雨落まで奥行三十六間、横幅十九間、檜皮葺にて八つ棟作りなり。其の檜皮葺なる事は、信州全體大寒國ゆゑ、瓦にては凍破るゝ故なり。常並の町家、百姓家にも、瓦葺といふものなし。さて山門より本堂まで二百間の敷石にて見事なり。善光寺に参りて本堂に通夜すれば、我が親しくせし人の死去りしにも再び逢はるとて、毎夜夥しき通夜人有り。余も参りて通夜せしに、誠に廣き堂に参りたることなれば、甚だ物靜かにて、燈明の光も細々と、人の顔もさだかには見えず。



善光寺

初夜
午後八時頃
四ツ
午後十時頃
丑刻
午前一時頃

女子用東西遊記常山紀談鈔

五



善光寺

念佛の聲幽かに聞えていと殊勝なり。初の程は人も稀々にて寂しきが、初夜も過ぎ四ツにも成り夜半にも及ぶ頃には、いつとなく段々に人多く成り、數十百人に及ぶ。是を亡者の參るなりと言ふ。さて丑刻過ぐる頃に、毎夜如來の開帳あり。寺僧遙の脇より絲を引きて戸帳を開く。暫くしてやがて閉帳す。夜は更けぬ。燈火の影は仄暗し。人は靜かなり、堂は廣し。甚だ幽寂にしていと有難し。此の時、信心の人は涙を流さざるはなし。余も諸方の佛院にも參詣せしが、此所に勝るものなし。毎夜かくの如く、誰々の參詣するといふ事もなければ、如來開帳の時刻にはいつにても堂に滿

戒壇
僧侶に佛戒を授ける壇

つるの參詣ありとなり。又戒壇巡りといふ事ありて、本尊の御座の下と覺しき所を、穴の中に入りて闇中を巡る事なり。先達の僧案内して、先に立ち件の穴に入る。三遍廻りて出づるなり。其の間念佛を唱ふるなり。此の戒壇巡りの時も、信心無き者は色々の變異ありといひ傳ふ。此の寺かく繁昌ゆゑに、門前の町家も、旅亭など大きな家多くして、甚だ賑かなる町なり。

善光寺のこなたに犀川筑摩川とて甚だの大河二つあり。此の二つの川の間を川中島と言ふ。昔信玄謙信の古戰場なり。戦ありし所は八幡原と言ふ。通り筋の少し脇なり。又、此の近邊に姨捨山あり。更



姨捨山

善光寺

六

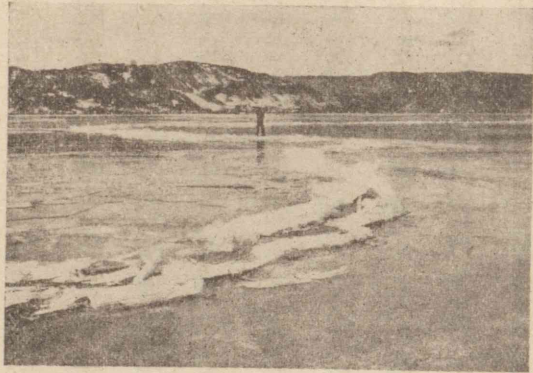
科あり。姨捨は低き山なり。山の二三分目に堂あり。其の堂の近邊に高さ二十間、横十四五間許の大岩あり。遠方よりもよく見ゆ。これ姨捨の古跡なりといふ。又此の邊より東北の方五六里の遠さに戸隠山を見る。此の邊にての高山なり。余は戸隠山へは遊ばず。其のあたりの人に聞くに、戸隠の山中に洞穴あり。其の洞穴の中に、昔より大蛇住めり。これを九頭龍權現と言ふ。唯今に至り、往古より戸隠の社僧、毎朝九頭龍權現へ御膳を供ふ。件の洞穴の中へ入れ置きて歸るに、明朝は其の膳部皆食ひ終りてありとなり。此の權現の靈驗いちじるしきこと、言葉に盡くし難しといふ。誠に奇異の事なり。

(同卷之三)

七 諏訪湖

信州諏訪の湖は周廻三里の小湖なり。然れども亂山重疊の中

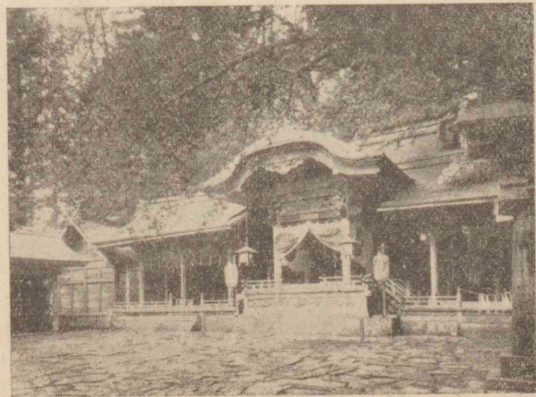
諏訪湖附近



諏訪湖神渡

にありて、景色は無雙の地なり。此の湖邊より湖上に富士山の北面を見る。富士山峭直にして寶永山を見ず。富士の形は此の湖上より見るも又奇なりといふ。さて此の湖に、世俗にいふ七不思議といふ事あり。其の中にも殊更奇妙の事とするは、此の湖水冬に至れば寒國の習にて一面の氷となる。厚さ數尺に及び、金鐵の如くにして平地に異ならず。霜月より翌年の二月までは、人馬皆氷の上を往來して少しも恐るゝ事なく、下の諏訪、上の諏訪、其の間三里の所なるを、冬は氷の上を一文字に通行する故、纔一里に成りて甚だ便利なる事なり。いかなる重き荷物を附けたる馬車にても、昔より氷

破れて水底に落入りし例なしとは不思議なりと問ひしに、冬の初に神渡かみわたといふ事あり。其の神渡ありて後は氷破るゝことなし。春に成り又神渡あり。其の後は氷未だ厚しと雖も、恐れて一人も渡るものなし。其の神渡はいかなることぞと言ふに、冬の初め、一夜湖上大きな音して物を引通るごとし。夜明けて見れば、氷の上を一文字に格別の大石、大木など引通りたるが如く、氷左右にわれ分れて一筋の道附きたり。これを神渡濟みたりと言ふ。此の後は人馬往來して過無し。二月の末又此の事あり。其の後は渡をやむる事なり。傳へいふ、諏訪明神は狐を眷屬とし給ふなり。狐は氷を



諏訪神社

聞くものなれば、此の神渡は明神の使はしめの狐の所爲なりといふ。

又諏訪に温泉ありて、諸人入湯する所なり。湖水の中にも温泉あり。常は知れず、唯氷りたる時は、湖中にて其の温泉の湧き出づる所ばかり氷らずして、氷に所々穴ありて湯氣のぼる。又、下の諏訪の拜殿の板壁のふし穴より、上の諏訪の塔の影、さし渡し一里を隔ててさし入る。又、上の諏訪明神のみたらしのほとりは、四季とも毎日少し許にても、雨降らずといふことなし。又、明神の廻廊の板敷釘を用ひず、人歩行するに音なし。其の外不思議數々あり。東海道にある天龍川は、其の源この諏訪湖より流れ出づ。小湖なれども底深く、魚鼈甚だ多くして、此の邊利益ある水なり。

(同卷之三)

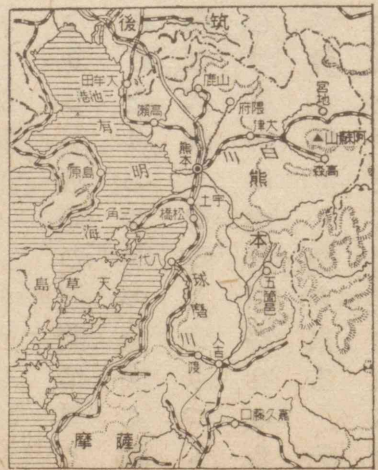
八 知らぬ火

筑紫の海に出づる知らぬ火は、例年七月晦日の夜なり。昔より世に名高きことにて、今も九州の地にては諸國より此の夜は集まり來りて見る事なり。京都の人に見る事の少なきは益後の故なるべし。京より九州に下る人々も、多くは皆商人の類なれば、益前に京都へ歸るやうに上り來り、又下る時も京都にて盆をしまひて後下る故に、八月に入りてやう／＼九州に下り著く。此の故に七月晦日の頃は、上方の人の彼地に留り居るもの甚だ少なし。

余は、かゝる奇異の事のみ探らん爲ばかりに下れることなれば、益早く長崎を立出でて、雲仙が嶽に登り、それより島原に出で、城下より舟に乗り天草の惣象（モウゾウ）といへる山の峯にて、知らぬ火を見物せり。先づ島原にて、知らぬ火見るは何れの地よろしきやと尋ね問

三
間
一間は一・八米

ふに、肥後國宇土八代松ばせの邊の浦々よし。又、殊によく見ゆるは天草の島なりといふにぞ、さらば天草に渡るべしと便船尋ぬるに、邊土故に便船もなければ小さき獵船をかりて渡る。此の日、天氣殊にのどやかにして、海上風靜かなれば、四方の眺殊によし。雲仙が嶽はうしろに成り、向ふ遙に東南に連りて、天草の島青み渡りたり。此の海は高山の麓ゆゑに、殊に深くて百五六十尋も立つとぞ。乗れる船は獵船なれば、かゝる事もよく知り居て語り聞かず。最も面白かりしは、此の船頭けふも鉾と言ふものを以て魚を取りし事なり。其の鉾の形鎗のごとく、柄の長さ三間、先は鐵にて作りて三つに割れ、かへり有りて、長さ一尺程なり。



有明港附近

八 知らぬ火

石づきの所に長き綱を附けたり。船頭此の鉾をつかふ事妙にして、海上に浮かめる魚は、小さきものといへども、これを突く事、鳥さしの鳥をさすが如し。大きな魚の船に遠きは、此の鉾を投ぐるに、矢を射るよりも慥なり。

けふも鉾を持ちて船ばたに立居たりしが、向ふの波間に黒く見ゆる物あるを、やがて件の鉾を投げかけたりしに、其の魚高く躍つて遁れ行く。船頭したり顔に彼の綱を丈長くゆるしやりつゝ、船をも操りて其の魚に従ひゆき、暫くして靜かに綱を引寄せたるに、其の魚彼の鉾のかへりにとぢられて段々船近く寄り來る。船頭、鉾の柄を取上ぐるまゝに、船の中にはね上げたれば、其の丈八九尺餘の魚の形細くして口吻くちび恐しく、京都にてさよといふ魚に似たり。早魚といふものなりとぞ。口吻の長さ二尺六七寸も有らん。末鋭く、膚鮫の如く、唯獸の角の如く、魚に有るべきものとは見えぬ。

かの一角クニノトの魚吻なりといふも、此の魚にて信ぜり。餘り珍しければ、船頭に此の口吻許り求めて歸れり。肉は油を取るといふ。餘

り大魚故に、食用には成り難しといふ。

さて、はからざる獲物に心慰みて、數里の海上も程近きやうに覺えて、はや天草の地方に近づけり。天草の砥石山など

いふ所を右に見なし、三角といふ所より山の間に船さし入れて行く。左右六七町に過ぎじと見え、水清く山そばたちて風景また他に異なり。北へくじけ、南へまがりて尋ね入るに、縁につゞく小松の

間に、藁屋の軒いと靜かなり。何人の住みけらしとゆかしくも見る。右の方は波打際とて廣く、砂子の清き事霜を置けるが如く



三 角 港

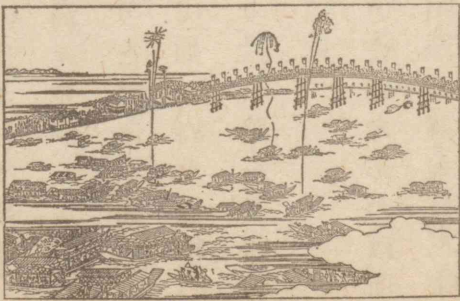
なれば、いざや、此所にて船しばしといへば、やがて渚に船さし附けて碇おろす。船頭いふは、此の濱邊には小さき蛸多し。おりたちて取り給へ。といふに、潮は浅し、砂子は清し。皆々おりて蛸見あり。田舎には珍しからぬ事も、京都に住める身にはいと心慰めり。船頭は例の鉾打かたげつゝ、船さし行きしが、程なく二尺に近き鱸一つ突き得て歸れり。取敢へず料理て煮る。鮮けくして味の美なること、さらにも言はず。

やゝ時移りぬれば船さし出して急ぐに、暮近きに天草の惣象といふ所に到る。此所は少し民家あり。多くは漁夫なり。此の村にあがりて、知らぬ火見る所の案内を頼みしに、百姓一人心よううけがひて、いたく汚れぬ蕙一枚携へ先に立ちてのぼる。東の海の岸にさし出たる山あり。高さ七八町もや有らん。此のあたりにての高山なるが、此の峯よろしと蕙打敷きて坐す。眞向ふに肥後

國有りて、唯一望につくす。宇土・熊本は、少し左に見えたり。右に日奈久、向ふに八代、其の間の海上わたり五六里より七八里に過ぎず。南北は入海數十里にして、其の限見えず。案内の人指さして、右なるは鼠島なり、左は大島なり、それは三つの島、これは幾島と、數教ふ。げに海上三里ばかりに、いと小さき島々見ゆ。知らぬ火は何れに出づるやと問ふに、島々見ゆるあたりと言ふ。初めの程は、人里も遠くいと物凄き島山なりしが、追々に知らぬ火見物の人出で來りて數十人に及ぶ。皆此の近國より、二日路三日路をも來りて見物する人々なり。

程なく海、の面もやゝ夕煙引渡して、人顔もさだかならねば、所々松どもあかして酒など取出し、思ひくゝに小唄・淨瑠璃・太鼓・三味線、或は謠・狂言など、各藝を盡くして戯れ遊ぶ。夜陰の事なれば、誰とは知れず、殊に諸方より集まりたる事なれば、遠慮はなし。彼の座

に登り、此の薙に連り、隔てなく睦び語らふ事、有馬、但馬など温泉の場の交の如し。今年は例よりは残暑も強けれども、かゝる海邊の高山に、殊に空は快く晴れたり。夜風徐ろに吹きていと涼しければ、夜の更くるも知らず。はや夜半にもなりしかど、知らぬ火の沙汰なし。今年はじめに見る人は、今宵はいかなる事ぞ、知らぬ火は出ざるや。但しはそらごとなりや、など、口々にいふ。余も怪しみ居たりしが、八ツ近き頃に、遙向ふに、波を離れて赤き色の火一つ見ゆ。暫して其の火左右にわかれて三つになるやうに見えしが、それより追々に出づる程に、海上竟り四五里ばかりがあひだに、百千の數を知らず。明かなるあり、幽かなるあり、滅ゆるあり、燃ゆるあり、高きあり、低きあり、誠に甚



天神祭 諸國中年行大事成

八
午前二時頃

だ見事にして目を驚かせり。其の火の色皆赤くして、提燈の火を遠く望むが如し。譬へば、大阪の天神祭を夥しく集めて見るに異ならず。實に諸國より來り見るもいたづらならず。所の人に問ふに、年によりて多き事も少なき事も定らずとぞ。今年はずぐれて多く出でたるも、余が幸といふべし。廣き海中に出づる事なれば、天草に限らず、肥後地よりも何れの浦にても皆よく見ゆるなり。然れどもいかなるわけにや、高山にのぼる程多く見事に見ゆとて、此の山なども群集せるなり。此の夜は、此のあたりの者、海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、恐れみて渡海の船を禁ず。獵船といへども此の一夜は乗る事なし。過ぎし年、肥後の士ひそかに小舟に乗りて彼の火の出づる所に至り見るに、唯其の火前後に遠く有りて、我が船近くは一つも見えざりしとぞ。余も今宵まのあたり見しかど、いかなる火といふ事を知るべからず。昔の人の知ら

へ 知らぬ火

見

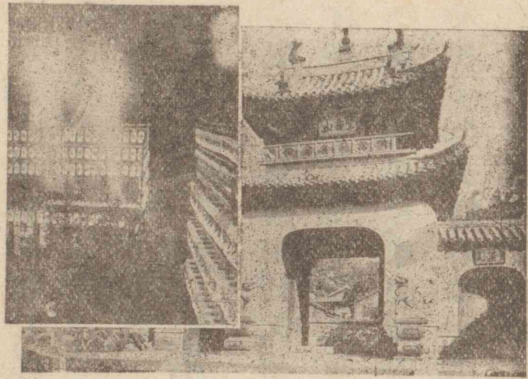
ぬ火と名付け置きしも尤もの事と覚えし。唐土には姚江の神燈
など是に似たる事もありとぞ。さて夜明くるまでかくの如くに
して、旭出づれば火の光漸々に薄く成り行きて星とともに消滅す。
昔、火の前の國、火の後の國と名付けられしも、故有ることなり。中
古の世、火の字を忌みて肥前肥後と改められしとぞ。又和歌の言
葉などにも、知らぬ火の筑紫など書けり。九州に遊ばん人は、必ず
此の折を考へて行くべき事なり。

(西遊記卷之一)

九 魂 祭

七月の魂祭は、何れの地にてもあるが中に、長崎殊にすぐれて仰
山なり。長崎の地の墓所は、皆四方の山の半腹にありて町よりも
よく望み見るに、盆中は各、提燈をともし事なり。墓一つに提燈二
つ三つ、富めるものは墓ごとに十、二十の提燈をともしせり。元來數

千萬の墓あるに、又數雙倍の提燈なれば、幾千萬といふ數を知らず。
夜に入れば四方の山皆火と成りて、其の見事なる事浪花の天神祭



寺福崇と祭魂の崎長

よりも勝れり。さて十五日十六日、家
毎に墓參とて、人々争ひて美々しく酒
肴を携へて墓の前に至り、先祖への馳
走なりと稱して、終日終夜酒宴を設く。
魚類はもとより、三味線尺八のたぐひ
を携へ行きて舞ひ歌ふ。又隣の墓所
にも此の通りなれば、京地などにて花
見などに行きしが如く、隣家の人と打
混じて、互に酒をおくり、肴を取交して、
他國の魂祭の如く、愁傷の體はさらに
大きに酒興に入る事なり。
なし。珍しといふべし。長崎にては、其の地に渡り居る唐人、折ふ

ボサ祭
墓參祭の訛か

女子用東西遊記常山紀談鈔

しに官府のゆるしを得て、五十人六十人打連立ち、崇福寺・福濟寺などいへる唐寺に詣でて、ボサ祭といふ事をなして佛を祭り、其の跡に大きに酒宴を催し、終日たのしむ事あり。これらの事にならひてや。

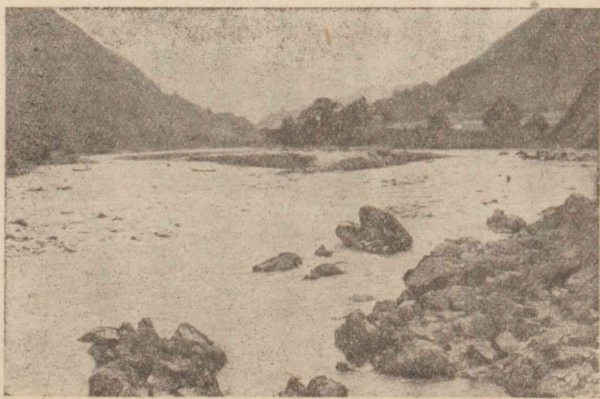
(同卷之二)

10 球磨川

肥後國球磨川は九州第一の急流なり。源遠く那須椎葉山五箇村邊より出でて、四十里ばかりも流れたり。殊に大河にて球磨郡の眞中を貫き、球磨の人吉の城下を過ぎて八代に至り、肥後の海に入る。余が歸路には、相良の御舟にて此の急流を下りぬ。舟はもとより輕し。人も纔に余と僕と二人に、舟人三人都合五人乗なれば、一しほに飛ぶが如く、八代まで十六里の川を纔二時に下り著きたり。其の頃は三月の末なれば、春水殊に多きに、人吉御城下青井

相良
球磨の領主

の宮の前より舟に乗れば、送別の人々夥しく打集まり、名残の恨いふもさらなり。高橋・雨森・右田の三士は、猶ほ舟に乗り移りて酒肴など携へ、纜を解けばもとよりの急流、見送りの人々は霞の中に入りて、招く扇もはや見失ひぬ。盃一つ二つめぐらすひまに、渡と言ふ所まで下りぬ。余、人々に「つきぬ名残なり。歸りの陸路も遠ければ、此所より上り給へ」と勸むるに、いづくまでといふ限もなければとて、人も襟をうるほして上りぬ。余もしばし船を離れて、又一つ二つ酌みて別る。これより下、水逆巻き落ちて殊にすみやかなり。



球磨川の急流

10 球磨川

10

舟はいと小さく細く作りて、首尾に楫を附けたり、これは眞逆様に大岩に流れかゝりたる時、あとばかりの楫はては舟の廻る事遅き故に、先にも楫を附けたるとなり。常に先の楫を第一に動かして居て、岩角を避け、思ふ方に舟をめぐらす。又、中程に楫を持ちて一人立てり。これは舟を前後左右に動かす爲なり。此の三人の舟頭しばらくも油断せず舟を操る。浪殊に逆巻く所にいたりては、舟の兩方に高き板を立つ。これは浪の舟中へ入らざるやうにとなり。十六里の間、四五箇所にはいたつて艱嶮の所ありて、浪の高きこと山の如く、怒れる岩角浪の間に夥しく峙ち出づ。かゝる所にては、領主などの通行の時は、瀬越とて、其の前後四五町、或は八九町ばかりも舟を離れて山に登り、此の嶮惡の瀬を越し終りて、又舟に乗り給ふとなり。

余はいと珍しく覚えぬれば、興に乗じて其の瀬をも舟に乗りながら下りぬるが、其の目ざましきこと筆の及ぶべきにあらず。渡より下つ方は、兩山けはしく峙ちて、峯は頭の上に臨み、流殊にせまりて細く、怪巖峨々として屏風をたゞめるが如く、壁を附けたるが如く、龍の騰るが如く、獅子の踞るが如く、或は雜樹影茂れる中に入るかとすれば、松杉森々たる岸に臨む。或は山吹の散りかゝりたる、躑躅の咲きそろひたる、山櫻の己が梢とあらはれ出でたる、千景萬色眸をめぐらすにしたがひ、兩山唯走るが如くにして、李太白が「輕舟既過萬重山」と詠ぜし、かゝる境にも思ひ出でらる。かの巫峽の急流は唐土第一にして、舟の下れること疾鳥、迅雲も及ばずといふも、いかでこれには過ぎん。

(同卷之三)

二 孝行

孝子太郎八並に妹萬龜は、薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の

李太白

中華民國唐代の

詩人

輕舟既過

朝に辭す白帝彩

雲の間

千里の江陵一日

にして還る

兩岸の猿聲啼き

て住まざるに

輕舟既に過ぐ萬

重の山

巫峽

揚子江の上流の

地

農治右衛門が子なり。太郎八當年十四歳、萬龜は十二歳なり。幼少の時より二人とも孝心にして、生まれつき柔和に、兩親の事かりそめにも忘るゝことなかりき。

去る酉の九月、兄太郎八は九歳、妹萬龜は七つするとき、其の母産後いまだ日數たゞざりしに、時節の事なれば、稻取入のため田へ出でて働きしに、血の道の病さし起り、それよりいろく養生せしかどもさらしに心よからず。今年まで六箇年が間床につき、やうく病につかれ、起臥さへ自身にはならざるに、二人の子ども、幼少ながら常に母の側に附添ひ、起臥の手傳より、食物の事に至るまで、こまやかに氣をつけ、母の不自由なきやうにこしらへ、病中の事なれば、母に心をつかはせ、又は腹立たせては悪しかるべしとて、たとへ如何やうの無理なる事ありても、あいにくとのみ機嫌よく返事して、少しも母の氣に逆はぬやうにせり。

去る酉の
安永六年

から芋
唐芋即ち薩摩芋
のこと

元來貧農の事なれば、少しばかりの田畠なるが、太郎八幼少ながら耕作の事をもつとめけり。留守のことは、妹に言ひふくめて氣を附けさせける。妹も亦かひくしく心を盡くし、其の孝養兄に劣らず。太郎八も夕方早く歸り、先づ其のまゝにて母のそばへ寄りそひ、手を握り、顔をなで、其の日の母の氣色くはしく尋ね、又我が田地のやうす、其の日にありし事をも語り聞かせ、粟の穂、又はから芋などを出して母に見せ、とかくして覺えず時を移し、つひに夕飯をも忘れし事多かりしとなり。夏の夜など、農民の藁屋、殊に蚊帳の中一しほ暑ければ、母も不便に思ひ、再三太郎八に、蚊帳の外へ出でて夕飯を食べよといへど、嘶すまざる間は飯を食はず。嘶しまひて夕飯を食ひ、また蚊帳の中へ入りてそばに付き添ひ、靜かに母を扇ぎ、快く世間嘶などして、其の身もうちくつろぎたる様子を見すれば、母も太郎八と嘶するにて、病の苦を忘れしとぞ。

さて、眠る前には兄弟の子供、我が耳を母の顔へよせて右と左に添ひ臥し、萬一夜中寝入りたる間に、母の氣分にも悪しく、呼び起す時は早く目のさむるやうに心得してぞ臥しける。又冬など寒き夜は、みづから帶をとき、母の足をふところに入れ抱きてあたゝめ、もし又母氣分あしく、痛みなどさし起り苦しむ時には、兄弟うちよりて脊中をさすり、手に取附き、自ら藥を口に含み母に飲ませなどして、泣き悲しみ、幼な心の氣遣ふ様子、傍より見るには、其の病人よりもかへつて兄弟の子供の方あはれにて、あたりの者共も力を添へて介抱してぞ遣しける。

母はかくの如く子供の介抱にて、貧しき中にも、遂に不如意のことを覺えず、病中に六箇年の月日を送りしに、其の病日々に重りて、今年の五月空しくなりぬ。兄弟の子供のなげき中々言はん方なく、さてあるべきにあらねば、親類うちより葬送の事を營みしに、兩

去年
天明元年

人の子供悲しみ歎きて、今生にて母の顔を見る事これまでなれば、葬送の期を一日なりとも延べたし。とて、晝夜母の尸の側を離れず泣き沈みしかば、此の體を見聞く人々、涙を流さざるはなし。

これより先、去年八月十八日、郡奉行得能左平次とかや、勸農の爲に村方巡行の時、小山田村の道の傍に、十二三歳の小兒草を刈りて居たるを見て、ねんごろに言ひ慰めて通られければ、後に従ひし庄屋三島喜左衛門、此の小兒は當村の太郎八と申すものにて、しかじかの孝子なり。とつぶさに語りければ、得能氏感心ありて、其の夜の旅宿にて、又此の事を尋ねられけるに、宿の女房よく知り居て、詳しく物語りけり。其の次第庄屋の申すところに少しも相違なければ、其の夜近邊の百姓を召集めて、此の事を聞き糺されしに、孝行いよいよ相違なかりしかば、翌日得能氏自身太郎八の家にいたり、其の様子を見分し、また其の父母を尋ね問ふに、つゆ違はざりければ、

早速こまやかに書附けて太守へ言上ありしに、太守も奇特に思召し、御褒美として、兄太郎八に米二十五俵、妹萬龜に錢だ五貫文をぞ賜ひける。母もそのころは病やゝ重り居けれども、あまり有難さに人々に扶けられて起きあがり、賜を戴きしとぞ。

右御褒美たまひけると、近村の農民馬數十疋におはせ、太郎八が家に運び來りしかば、これが孝子への御褒美なりと、遠近の人々たち集ひ、褒め羨まざるはなし。得能氏よりも錢一貫文を與へられしかば、庄屋村役の人、其のほか近きあたりの寺々まで、思ひくゝにそれゝの物を與へおくりぬ。得能氏勸善のためにとて、そのほとりの男女に命じて、太郎八が家に行きて慶びを言はしめ、また上よりの賜を拜見せしめらる。このことつひに國中にかくれなく、人みな兄弟の子供の孝行を稱美し、兄を孝太郎と呼び、妹をお孝と名附けける。

われ、近年、醫術修業のため、諸國に遊び、薩摩の國にしばし逗留の折ふし、増田熊助なる人、此の事を稱歎せらるゝを聞き侍れば、人の子の手本ともなれかし。かつは國守の御仁政の遍きを仰ぎ奉り、また得能氏仁慈の心深きを感じ、その言上書の寫しを請ひ求めて、ありしまゝを書きしるし、梓にちりばめぬ。嗚呼、わが母にも去年おくれぬ。世上の人々、父母存生の内、孝心怠りたまふべからず。

(同卷之四)

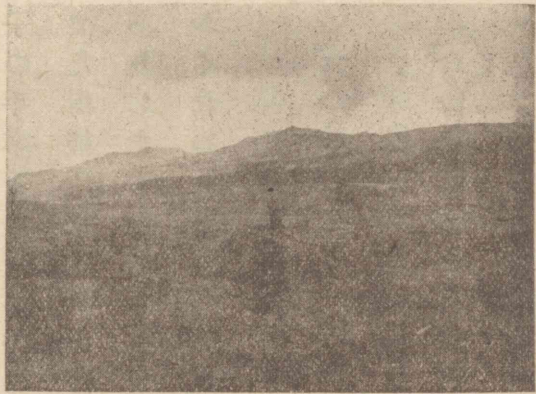
二三 阿蘇山

今宵は阿蘇の大宮司のもとに一宿して、明日こそは峯にのぼらんと志ししに、晝過ぐる頃より風の色少し悪しう見ゆれば、明日になりて雨降り、登山の縁を失はん事もやと思ひめぐらすにぞ、心あわたゞしう成り來て、今よりもと思へど道なし。過ぐさんも本意



阿蘇附近

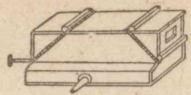
なければ、山の北の麓の石的といふ里に入りて、あないの人を頼みて山の北おもてより登る。木こりのみ行きかへば、道いと細くけ



はし。絶頂に至り著けば、日既に暮れはてぬ。晝參詣多き時に商ふためと、旅人などの行暮れたるが宿る爲に茅屋あり。唯むしろもて圍ひたるばかりにて、床とてもなし。此の内に入りて宿る。名高き峯に登りつめて、空もいと近う星探るべき程なるに、夜嵐の吹き渡る音も物凄く、一人人倫絶え、四方寂寞たるに、夜ふくるまで目も合はず。又燃ゆるあたりも程遠からで、地震ひ山動く、世にある心地にはあらず。

阿蘇山

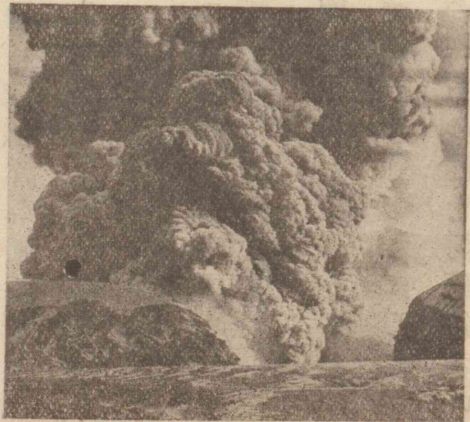
山かづら
曉に山の端にか
かる雲のこと



ふくじ

夜明けぬれば、昨日思ひしには異なりて、山かづら引渡せる間に、朝日の影いと花やかなり。夜半の侘しさに引きかへて心勇めりとく起出でて、燃ゆるところに到る。

大なる穴あり。これをみかどといふ。中のみかど、北のみかど、法性崎と名附く。都合三箇所なり。當時盛に燃ゆるは法性崎なり。たとへばふいごの口の如し。黒煙天を覆ひ、時々火出でて、其の音の夥しき事、唯今此の山みぢんに碎くる心地す。其の勢は筆に書き盡くすべくもあらず。しばし見居たれど、我が身も山とともに碎けさるべき心地して、飽くまでも見つくしがたし。少し下れば、大きな堂あり。内に額あり。壽安鎮國山と書けり。これはも



口中岳噴火口

三 阿蘇山

三

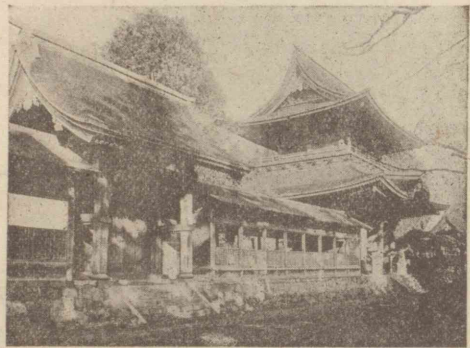
ろこしの帝より昔此の山の靈異なる事を傳へ聞き給ひて此の五字をもて山を封じ給ひしなりと。堂は傾き損じたり。人はもとより住むべき所にあらず。昔はこれより下つ方に寺院多くありしといふ。すべて絶頂は海濱の如くにして硫黄の氣にて白く見え石も皆全くその如くにして土砂ある事なし。しばし下れば土見え草ありて初めて世界の景色あり。西の方に遙に雲仙が嶽あり。北の方に豊前の彦山を望む。其の外の眺望は四方の山にへだてられたり。

此の阿蘇の山は目八分の山四方を圍みて堤を築きたるがごとく連りめぐれり。其の眞中に此の阿蘇山のみ基を別にして一峯秀でたり。奇妙の地形なり。此の山の四方の麓を阿蘇谷といふ。幅二三里程づつにして平田あり。唯西の方のみ少しばかり四方の圍の堤の如き山きれて川流れ出でたり。傳へ言ふ上古の世は

此の地湖にて阿蘇山は湖の中の島なりしが阿蘇の明神昔此の國の守なりし時西の方の山を切り通して水を落し湖を干して田地となせりと。誠に此の地の様子をつらく見るに湖をりしこと

虚説にはあらじと思はる。又人智の古今なき事を感じ。

それより山を下り麓の本社を伏し拜み神主は詩歌のすき人と聞けば訪るゝにいなみもせずいと親しくもてなしぬれば一日二日留まる。其の家の事尋ねしに神孫正しく天正の頃までは三十五萬石を領せるが豊後の大友氏の爲に零落せりとぞ。今にては其の面影もあらず。然れども位は貴く二位まですゝめる例なり。舊き家なれば色々珍しきことも多かり。



阿蘇神社

那智の瀧
紀伊國の東部山
中にある

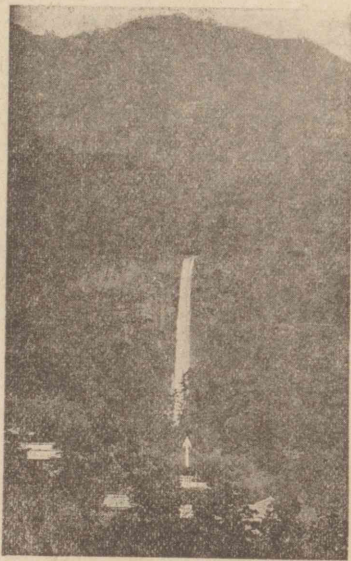


一三 那智の瀧

那智山の瀧は誠に天下無雙、目を驚かす瀧なり。そのあたり山のたゞずまひより、堂宇の設樹の生ひやうまで、他山には勝れて神仙の境界といふべし。この瀧のことは、幼き時より聞き居て、かうやうにもあるべしと思ひしには似もよらず、格別に異なり。初めに思ひ居しは、懐のやうに山の抱へたる所に巖石峨々と聳え、その中に大河を切り落したるやうに水逆巻き落ちて、水煙一二町にも飛散り、雨の降るが如く、山鳴り響き、その音遠く三十町五十町の所までも聞ゆべし。その瀧の全體の趣を譬へて言はば、力士の荒れたるが如く怖しくて、目とめて久しくは見ることもなるまじ。余が如き虚弱の者は、神氣も遠々しくなるべしと思ひ居しに、さはな

くて、瀧の全體の趣天女の薄衣を著て立ちたるにも譬へつべし。

瀧の落つる所は、一枚の岩にて壁を作りたるが如き所なり。其の石壁の横の廣さ五町も十町もあり。但し遠方よりは、この石壁



那智の瀧

樹木の梢に出でて全く見ゆれども、近く寄りて瀧見るあたりにては、兩方に程よく大木の杉多くありて、石壁の横廣くは見えず。水はまことに天より落つる心地すれど

も、水の幅は殊の外に狭く、大抵幅一間ばかりに見ゆ。されど、廣く高き所なれば、實は二三間もあるべし。高さは直下五六十間に見ゆ。上の方暫くは水筋通りて見ゆれども、それより下にては、石面に水碎け、色白く霧の如くに散りて、その見事なること言ひ盡くす

文覺上人
鎌倉時代の傑僧

京の大佛
京都東山方廣寺
の大佛

廬山の瀧
支那の江西省に
ある、李白の詩
に「飛流直下三
千尺、疑ふらく
は是れ銀河の九
天より落つるか
と」といふのが
ある

べからず。下には大石多くありて、瀧壺といふべき淵はなし。其の音も格別甚だしからず。瀧近く寄りても神氣の遠々しくなるやうにはあらず。文覺上人の荒行も虚言にはあらずと見ゆ。皆人の高さは二百間幅三十間などといふは、仰山に實を失うて言へるなるべし。この瀧のみに限らず、すべての物賞美に過ぎて實を失ふこと多しとぞ覺ゆる。されど余も京の大佛を大いなりと聞き居、越中の立山を高しと聞き居たりしが、初めて大佛を拜し、立山を望みたりし時に、さのみ大いなりとも高しとも思はざりしに、日を経て見るたびに大きになり、高くなりしが如く、この瀧も幾度も見ば、高くも廣くもなるべきにや。惣じて那智は、全體の奇にして美なることに於て言語に絶せり。唐土の廬山の瀧より遙かに勝れりと言ひ傳ふるも、實にさもあるべきかと思はる。

(西遊記續篇卷之四)

解題

作者 湯淺常山、名は英、備前の人で、幼時から池田光政侯に仕へた。性質清廉で、行狀恭儉、専ら正道に就いて精勵し、藩公の信任を得、常に善政を布いて藩中の信望を集めた。文武兩道を兼ね、武は兵法、槍術に長じ、文は當時の名家服部南郭に學んで、盛名があつた。天明元年(三四二)歿。年七十四。

成立年代 本書は、常山が機會ある毎にいろ／＼な記録を集め、又は人の言を記し置いたのを纏めたもので、序文によると、之を纏めたのは彼の六十歳前後であつたと思はれる。

内容 戦國時代から徳川時代初期に至るまで、凡そ百年間の、名將傑士及び貞婦烈女の言行を輯録したもので、本編と拾遺その他とを

併せて全三十卷、凡そ五百種を採つて居る。其の期する所は、これら英傑其の他の記録の散佚を防ぐと共に、廣く士人等の修養に供しようとするにあつたが、果して本書が世に用ひられて、世道人心に及ぼした影響には少なからざるものがあつた。文章は、只平明率直に事實を記録するに止まり、文飾の少しも加はらない所に、簡潔にして且つ素樸な一種の味がある。

上杉輝虎

法號は謙信
戰國時代の武將
天正六年越後の
國春日城に歿し
た

年四十九

鶴

一種の怪鳥
猿の首、虎の體、
蛇の尾をしてゐ
たといふ

頼政

姓は源、平氏の
專横を惡み、以
仁王の令旨を以
て兵を擧げ、宇
治の平等院で戰
死した
天仁元年（二六八）
鳥羽天皇の御代
仁平三年（二八三）
近衛天皇の御代

一 上杉輝虎平家物語を聽く

輝虎、或夜石坂檢校に平家を語らせて聞かれけるに、鶴トビの段を聽きて頻に落涙せられけり。かたへの者ども怪み問ひければ、輝虎の曰く、吾が國の武徳も衰へたりと覺ゆるなり。昔鳥羽天皇の御時、禁中に妖怪ありしに、八幡太郎鳴弦して鎮守府將軍源義家と名告りければ、妖怪忽ち消えぬといへり。その後、頼政鶴を射たれども猶ほ死せずして、井野隼人刺殺してとゞめたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり。鶴の出でしは、近衛天皇の仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武徳既に劣ること遙なり。今又頼政におくるゝこ



琵琶法師

と四百五十年、我亦頼政に劣ること遠かるべければ、覺えず涙の流るゝよ。とぞ語られける。

相州

相模國

佐野城

下野國佐野

天德寺

佐野了伯

秀吉の臣

兵法に通じ特に

槍の名人であつ

た



鶴

高

嵩

谷

治

又これと相似たる物語あり。相州北條の幕下佐野城主天德寺、勇將なりしが、或時琵琶法師に平家を語らせて聞きけるに、未だ語らぬ先に、我はただ哀なる事を聴きたくこそあれ。その心得せよ。と言ひしに、法師承り候。とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたりしに、天德寺雨雫と涙を流して泣きたりけり。さて又、今一曲、前のごとく哀なる事を聴きたし。と言へば、那須與一が扇の的を語る。半に及びて、天德寺また落涙數行に及びり。

右大將
源 頼朝
蒲冠者
範 頼
義朝の子
頼朝の弟

後日に、側に仕へし者どもに、過ぎにし日の平家は如何聞きつる。と言ふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、哀なる方少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばせられ候。今に不審なる事と申し合ひ候。と言へば、天德寺驚きて、只今までは各を頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて力を落したるぞとよ。まづ



那須與一
小堀綱音筆

佐々木が事をよく心に浮かべて見られ候へ。右大將、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生倅を高綱に賜はるにあらざや。その甲斐もなく、この馬にて宇治川の先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじき暇乞して出で立

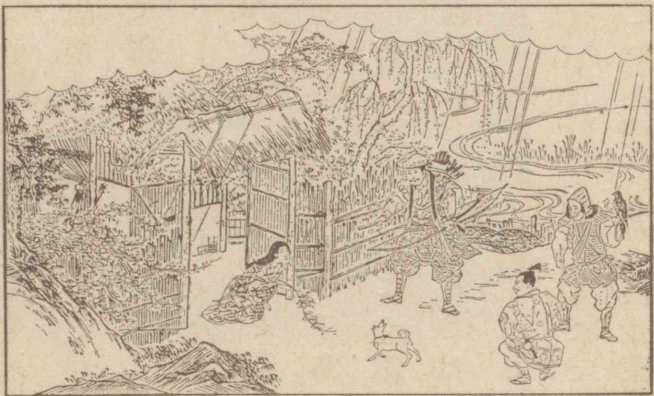
ちけるその志、あはれならぬ事かは。とて屢涙をのごひけり。
 暫しありて言ひけるは、又那須與一も、人多き中より選ばれて、唯
 一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗入れて的に向ふに至るまで、
 源平兩家鳴を静めて之を見物す。若し射損じなば、味方の名折た
 るべし。馬上にて腹搔切つて海に入らんと思ひ定めたる志を察
 して見られよ。弓箭とる道ほどあはれなるものはあらじ。我は
 いつも戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を執り候故、右の平家
 を聞く時も、兩人の心を思ひやり、落涙に堪へざりしなり。然るに、
 各はあはれになかりきとや。思ふに、各の武邊は、只一旦の勇氣に
 任するにて、眞實より出づるにてはなきやと思はれ候。それにて
 は頼もしからず」と歎きけりとぞ。

(卷一)

二 太田持資

太田持資
 江戸城を築いた
 名將
 薙髪して道灌と
 いった
 上杉定正
 鎌倉幕府の執事
 持朝の四子
 扇ヶ谷六代の主

七重八重の歌
 兼明親王の御作
 後拾遺集にあ
 る



山吹の花一枝
 江戸の名所
 會圖

太田左衛門大夫持資は上杉定正の長臣なり。鷹狩に出でて雨
 に逢ひ、或小家に入りて、蓑を借らん
 といふに、若き女の、何とも物をば言
 はずして、山吹の花一枝折りて出し
 ければ、花を求むるにあらず。とて怒
 りて歸りしに、これを聞きし人の、そ
 れは、

七重八重花は咲けども

山ぶきの

みの一つだに

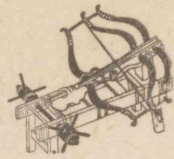
なきぞ悲しき。

持資驚きて、それより歌に志を寄せけり。

二 太田持資

三

廳南
上總國長生郡
琴



底ひなきの歌
素性法師の作
古今集にある

女子用東西遊記常山紀談鈔

定正、上總の廳南に軍を出すとき、山涯やまざらの海邊を通るに、山上より
琴おんを射かけられんや、又潮満ちたらんや、はかり難しとて危みけり。
折節、夜半の事なり。持資、いざ、われ見來らん。とて、馬を馳出し、やが
て歸りて、潮は干たり。といふ。「いかにして知りたるか」と問ふに、
遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮のみちひをぞ知る。

と詠める歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ。といひけり。

又、いづれの時にや、軍を返す時、これも夜の事なりしに、利根川を
渡さんとするに、闇さは闇し、淺瀬も知らず。持資また、

底ひなき淵やはさわぐ山川の

あさき瀬にこそあだ波はたて。

といふ歌あり。波音荒き所を渡せ。といひて、事なく渡しけり。

(卷二)

三 上杉謙信鹽を送る

武田信玄の領國は甲信二箇國にして、何れも海によらざれば、鹽
を自國に取るに能はずして、遠く東

海北條の領國に仰ぐことなり。氏眞

北條氏康と謀りて、陰ひそかにその鹽を閉ぢ

て甲信に送ることを禁めたりける程

に、甲信兩國の人民は固より、兵士も亦

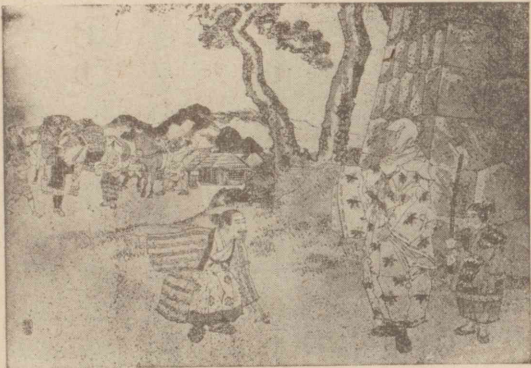
大いに困しみ、一種の兵糧攻に異なら

ざりけり。上杉謙信これを聞き、信玄

に書を寄せていひけるやう、聞く、氏康

氏眞君を困しむるに鹽を以てすと。

われ公と争ふ所は弓箭にありて米鹽



謙信鹽を輪る高橋松亭筆

これ不勇不義の極みなり。

三 上杉謙信鹽を送る

壹

にあらず。請ふ、今より以往、鹽を我が領國に取られ候へ。多寡た
だ命のまゝなり」と。やがて賣人あきうらひに命じ、價を平にしてこれを給し
けり。

(卷二)

四 山内一豊の妻

山内土佐守一豊、其の始織田家に仕へたりけり。東國第一の駿
馬なりとて、安土に牽き來りて商ふ者あり。織田家の士是を見る
に、誠に無雙の駿足なれど、價餘りに貴しとて求むべき人無く、徒に
牽きて歸らんとす。

一豊其の頃は猪右衛門と言ひしが、此の馬望みに堪へ兼ねたれ
共、如何にも叶ふべからざれば、家に歸り、身貧しき程口惜き事は無
し。一豊奉公の始に、天晴斯かる馬に乗りて、家形の前に打出づべ
き物を」と獨言しければ、妻熟々と聞きて、其の價は如何許にて候か。

山内土佐守一豊
初め織田信長に
仕へ、後關ヶ原
の戦の功により
土佐二十三萬石
に封ぜられた
安土
近江蒲生郡安土
村
信長の居城

家形
殿様

と問ふ。「黄金十兩とこそ言ひつれ」と答ふ。妻聞きて、然程さかに思ひ
給はんには、其の馬求め給へ。其の料をば進らすべし」とて、鏡の奩
の底より取出して、一豊が前に差し置きたり。一豊大いに驚き、此

の年頃身貧しく苦しき事のみ多かり
しに、此の金有りとも知らせ給はず。
心強くも包み給ひけん。今此の馬得
べしとは思ひも寄らざりき」と、且つは
悦び且つは恨む。

妻仰の旨理にてこそ候へ。然り乍



山内一豊夫人
日本歴史人物大鑑

らは是は妾、此の御家に參りし時、父此の鏡の下に入れ給ひて、あなか
しこ世の常の事に努々あつ用ふべからず。汝が夫の一大事とあらん
時に進せよ」と戒め給ひ候ひき。然れば、家の貧しきも世の常なれ
ば、堪へ忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃有るべしと承

馬揃
武人の乗馬を一
場を集めて主公
の檢分すること

四 山内一豊の妻

卷

れば、此の事天下の見物なり。君も又仕への始なり。良い馬召して見参せさせ申さんと存じ候てこそ奉れと言ふ。一豊悦ぶこと限りなく、頓て其の馬求めてけり。

程無く京にて馬揃有りし時、打乗りて出でしかば、信長大いに驚き、天晴馬やとて、事の由を聞き給ひ、東國第一の馬、遙に我が方に牽きて來りしを、空しく歸さんは口惜しき事ぞとよ。それに年頃山内は久しく浪人して有りしと聞く。家も貧しからんに求め得たるは、信長が家の恥を雪ぎたる上、弓箭取る身の嗜み是に過ぎたる事や有る。と感じて、是より次第に用ひられしとぞ。

(卷四)

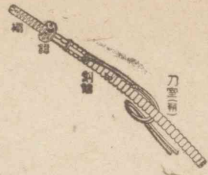
森蘭丸

織田信長に仕へ誠忠を以て寵遇を受け、本能寺の變に奮戦して殉死した

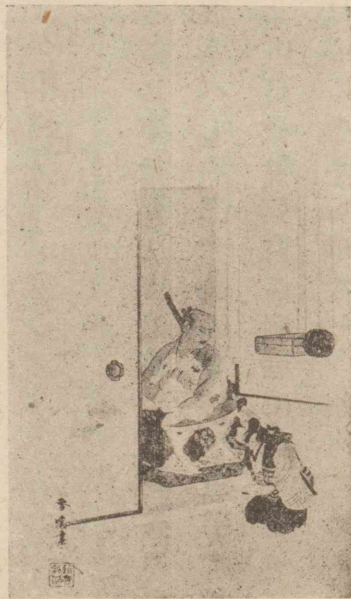
五 森蘭丸の才敏

森蘭丸は三左衛門可成が子にて、信長寵愛厚し。十六歳にて五萬石の地を與へらる。或時刀を持たせ置かれしに、刻鞘の數を數

刻鞘



へ居たり。後に信長、側の人を集め、刻鞘の數言ひ當てなん者に、此の刀を與ふべき由言はれければ、皆推し料りて言ひけるに、森は先に數へて覺えたりとて言はず。信長其の刀を森に與へられける。信長森が明敏を試みらるゝ事多かりけれども、一度も過無く、其の才老年の人も及ぶべきに非ず。明智が恨ある事を察し、潜に信長の前に出て、光秀飯を食ひ乍ら、深く思慮する體にて、箸を取り落し、やゝ有りて驚きたり



信長蘭丸を異とす 谷口香橋筆

佐和山 近江國彦根城の東にある

是程思ひ入りたる事、別の子細はよも候はじ。恨み奉る事云々なれば、大事を企むならん。刺し殺すべしと言ひけるを、信長、否とよ。佐和山をば終に汝に與ふべしと言はれけり。これは、森嘗て、父が

坂本
琵琶湖の西岸
比叡山の麓

浅野長政
豊臣五奉行の一

秀吉の死後家康
秀忠に仕へて武
功を樹て和歌山
三十七萬六千石
に封ぜられた
名護屋
佐賀縣東松浦郡
の地

女子用東西遊記常山紀談鈔

討死の跡にて候へば、坂本を賜はれ。と申しけるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ、信ぜられざりしが爲なり。果して弑せられき。
(卷五)

六 浅野長政の諫言

太閤名護屋に御座して、朝鮮の軍はかゝしからぬを怒り、諸大將を集め、今は秀吉自ら押渡るべし。三十萬の軍勢を三手にして、利家・氏郷に先陣させ、三道より打破り、眞直に明朝に攻入るべし。日本の事は、徳川殿御座せば心に懸かる事なし。如何に思ふ。と有りければ、東照宮聞召し、利家・氏郷に向はせ給ひ、人多き中より選び出されて、一方の大將たらん事、面目にてこそ候へ。抑、我等弓箭を取りて年寄り候。斯かる時に人の跡に屈み残りたらんは口惜しき事なり。必ず一方の先驅を承るべし。と仰せられけるに、浅野彈

五畿・七道

畿内五國即ち山城・大和・河内・和泉・攝津
七道とは
東海・東山・北陸・南海・西海・山陽・山陰

正少弼長政進み出でて、暫く待ち候へ。主君此の年月の御振舞、昔にかはりてこそ候へ。古狐の入替りたると存ずるなり。と申しも果てぬに、太閤大いに怒り、やあ、秀吉が心に狐の入替りたる所謂屹



浅野長政
侯爵浅野家藏

と申せ、申損じなば首打落さんものを。と睨まれたるに、長政ちつとも騒がず。長政が如き何十人が首刎ねられんも何條事の候べき。抑、由無き軍を起して朝鮮八道は申すにや及ぶ、日本六十餘州に父を討たせ、兄弟を失ひ、夫に離れ、子に先立たれ、歎き悲しむ者満ちたり。夫に兵糧の運送相加はり、六十餘州の内悉く荒野となる。今發向候ひなんには、五畿七道、盜賊發起せん事必然なり。徳川殿如何に思召し候とも、争でかこ

六 浅野長政の諫言

れを防ぎ給ふべき。爰を思召して先陣とは仰せ候やらん。主君昔の御心ならんには、是程の事など御心附の無かるべき。これ唯事に非ず。一定古狐の入替りたるに候。鄙しき人の詞に、「人取らんとする鼈は必ず人に捕らる」とは此の事に候。と憚る所なく申し放てば、太閤、何れにもせよ、己が主に斯く雑言するこそ奇怪なれ。とて飛びかゝらんとし給ふを、人々押隔てたり。長政はさあらぬ體にて、人々に色代して靜かに座を立ちて陣所に歸る。斯かる所に、肥後國に逆徒、一揆を企つと聞えければ、太閤大いに驚き、長政を召出し、汝が嫡子左京大夫幸長、罷向ひて切靜むべし。と下知せられ、本多大輔中務忠勝を添へて肥後の國へぞ向けられける。(卷十)

七 小早川隆景の遺訓

安藝中納言毛利輝元は、關ヶ原の時、秀家と共に徳川家に弓箭を

毛利元就
隆元
輝元
元春
元隆
元清

取りしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝備後等の國を削られ、長門周防兩州を賜はりけり。是より前、小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたりと言ふべし。これより後、苟にも國を貪る心有らば、忽ち滅ぶべきよ。と戒められしに、輝元

隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる、露も違はざりけり。隆景は、武勇のみに非ず、智謀にも優れたり。

父元就病重くなりて、其の子を集め、兄弟の數程箭を取寄せ、多くの箭を一つにして折りたらんには、細き物も折り難し。一筋づつ



小早川隆景
安藝米山寺藏

分ちて折りたらんには容易く折るゝよ。兄弟心を同じくして相親しむべし。と遺言せられしに、隆景その時、争は欲より起り候。欲をやめて義を守らば、兄弟の不和候まじ。と言はれしかば、元就悦びて、隆景の詞に従ふべし。と言はれしとぞ。秀吉、九州を討平げられて後、筑前五十萬石を小早川に與へられしに、隆景、これは吾に過ぎたる事なり。此の頃まで敵なりし身に大國を與へらるゝは、吾を愛するに非ず。九州を懐けん爲の假の謀よ。と思ひて、秀詮に國を譲り、備後の三原に引籠られしとなり。

(卷十六)

八 家康へ諫言

徳川家康濱松におはしましし頃、或夜本多正信御前にありしに、誰人にてかありけん、懐より書を取り出し、諫め奉るべしとかねてより存ずる事の候うて、書き候ふものなり。と申せば、大いに喜ばせ

給ひ、それ讀め。と仰せ有りければ、披きて讀みけるに、一條讀み終る度毎にうなづかせ給ひ、尤なり。と仰せられ、讀み終りければ、汝が志感ずるに詞なし。これより後も心置なく告げよ。返すゝ神妙なり。と繰返し仰せければ、忝き由申して退出す。



徳川家康

正信居残りて、只今諫め申ししこと用ふべき事に候はず。と申す。家康、大に氣色をかはらせ給ひ、いやとよ。己が過は知らずして過ぐるものなり。國を領し、人を治むる身には、過を告げ知らせ諫むる者は鮮くて、唯諂ひて主君の言ふこと道に違ひても、さは候はじと詞を返す人はなきぞかし。諫を防ぎし人の、國を失ひ身を亡ぼし、後世の笑ひ草となりし

例多し。只今我を諫めし者、日頃心を盡くし、見及ぶさまにつき諫めんと思ひて書き記し、時もあらば見せんと思ひ居たりし志、何に譬へんやうなし。その用ふべきと用ふべからぬには依らざるなり。唯彼が忠心を愛するなり」とぞ仰せける。

また或夜の御物語に、凡そ主君を諫むる者の志、軍に先駆するよりも大に踰え優れり。其の故は戦に臨みて一番に進み出づるは素より身を捨てての事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりととも、後の世に名を残し、死後の譽となるぞかし。幸に功名を遂ぐれば、恩賞にて家富み子孫榮ゆるなり。されば得ありて失なき忠なり。諫は然らず。主君不道にて善を憎むに、進み出でて直言する者、十に九つは刑罰にあひ、妻子を亡ぼし果つる様になり行くぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言は聊かも身のためを思ふ心あらば、いかで主君の前にて

直言すべき。唯、人に君たる者の賞すべきは諫臣なり」とぞ仰せありける。
(卷十八)

九 松平信綱の恭敬

松平伊豆守信綱出仕の時、裏附の上下著る事無し。屋敷に有りてもこれを著られず。常に言はれしは、人の心衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずしては、忠を盡くす事を得難し。先づ衣服より心を附けて恭敬を忘るべからず。我に於ては斯くの如く勉めざれば、忠勤を成し難し」と言はれけり。

信綱實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正嗣の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。竹千代君御誕生有りし時より御家人になされ、御遊び相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子を産みたるを、若君此方より御覽じて、長四郎よ、取りて進らせよ。

松平信綱の恭敬

松平伊豆守信綱
徳川家光・家綱
に仕ふ
智謀を以て擢で
られ老中となつ
た

竹千代君
徳川家光の幼名
將軍秀忠の子
大 殿
秀 忠
家光の父

御壺
中庭

と仰せけるに、年十一歳なれば如何にも叶ふまじき由を申す。晝は驚きて飛去りもやせん。能く見置て、日暮れて此方の軒に梯指して登り、忍び行きて取るべし」と有合ふ人々勸めければ、力無く日暮に忍び登りて、やう／＼傳ひ行きけるが、踏み損じて御壺の内にどうと落つ。秀忠公、御刀執らせ給ひ、障子開かせ給へば、御臺所燈火取つて出でさせ給ひ御覽するに、長四郎にて有りけり。秀忠、汝は何故爰には來れるぞ」と御尋ね有りしに、今日の晝、御殿の軒に雀の子産みたるを見て、餘りの欲しさに取りに參りて候」と申す。否否、己が心にはあらじ。誰が教へけるぞ」と様々に御推問有れども、幾度も争ひぬ。年頃にも似ぬ不敵なれば、疾く大いなる袋の中へ押入れて口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事の由を有りの儘に申さざらん程は、何時までも斯くて候へ」と仰せけれども、猶ほ詞を換へず。夜既に明けて常の御座を出でさせ給ふ。御臺

所は早く心得させ給ひて、彼が幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰せなりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房達に仰せ有りて、朝飯を召して、食べ候へ」とて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。晝程入らせ給ひて、又御推問有れども遂に其の詞を屈せず。御臺所御詫言有りしかば、さらば重ねてを慎めよ」と仰せ有りて御赦あり。さて御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にて生立ちたらんには、竹千代の爲には雙無き忠臣にてこそ候はめ」と、殊の外悦ばせ給ひけるとかや。

(卷十八)

10 塚原卜傳の活眼

塚原卜傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。卜傳劍術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源院殿の師たり。その後、卜傳、上野の上泉伊勢守といふ劍術者に

常州塚原
常陸國鹿島郡
光源院殿
足利義輝

る 塚原卜傳の活眼

光

就きて神陰流の祕奥を學びたり。

ト傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、かの弟子、或時、道のほとりに繋ぎたる馬の後を通りけるに、かの馬はねたりしに、ひらりと飛びのきて身に中らず。見し人、さすがに塚原が弟子の中にも勝れたるよと言ひしに、違はず。と賞めてト傳に語りけるに、ト傳大いに驚きて、さては一の太刀授くべき器にあらず。と言ひけり。

諸人この事を不審して、試みよ。とて、類なきはね馬を道のかたへに繋ぎ、ト傳を招きて側に隠れて見居たりしに、ト傳、馬の後を除けて通りし故、馬はねんともせず。人々はかりしに違ひければ、後にかくと語り、さてかの弟子の早業を譽め給はぬは如何。と言ひければ、ト傳聞きて、さればとよ。馬のはぬるに飛びのきたるは、業の利きたるに似たれども、馬ははぬるものといふ事を忘れて、うかと通り

りしはおこたりなり。飛びのきたるは仕合はせと言ふものなり。劍術も時により下手にても仕合はせにて勝つことあるべし。それは勝ちたりとも上手とはいふべからず。唯先を忘れず機をぬかぬを善しとするなり。一の太刀の位に及ばざること遙なれば、譽めざりき。と答へきとぞ。

(卷二十三)

二 小櫃與五右衛門

會津中將保科正之は、台徳院殿の第九男にておはせしが、殊に豪氣あり。

ある時、近習の人に向ひて、人々の樂しむ所を尋ねられしに、小櫃與五右衛門といへる者、臣が樂しむ事二つあり。その一つは、家貧しくして奢といふ事を知らず、天より命ぜられ貧を樂しむ由を申す。他の一つを問はるゝに、これは憚る所の候。とて言はず。しひ

台徳院殿

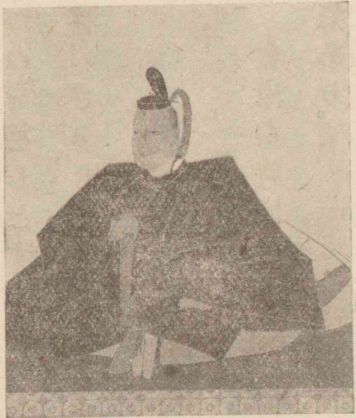
二代將軍秀忠

小櫃與五右衛門

名は素伯

江戸の儒者

て問はれしかば、謹んで申しけるやう、大名に生まれざるを、天の冥加と存じ、樂しむ處なり」と答へければ、その子細を問はるゝに、大名は、天性賢くおはし候ても、臣下これを馬鹿にとりなし候。祿少なき身は、その師や朋友、惡しき事を戒め諫め候ふ故に、その身を省みて馬鹿にならず候へども、大名はさ



保 科 正 之
伯 松 平 保 男 藏

はなく候。臣たる者、とかくさからひては身の爲よからじと存じて、其の主のよき事あれば、山の如くに譽め申し、いろ／＼の惡しき習はしを附け候ほどに、いつとなく恣になり

もてゆき、それよりは一言の諫をも申しがたく候。いかに聰明にても、學問もなく、教といふ事を知らず、善事を辨へ給ふべきやうなきゆゑ、馬鹿になりはて候は、口惜しき事に候はずや。臣、大名に生

山崎嘉右衛門
號は蘭齋
京都の儒者

稻葉一徹

幼時僧であつたが後還俗し、信長に仕へて武勇の譽高く、信長の死後秀吉に仕へた
數寄屋
茶の湯の會をする室
韓退之名は愈
中華民國唐代の文豪

まれざるを樂しみと存じ候は、この子細に候と申せば、中將つくづくと聞召して、よくも言ひたるかな。尤も至極せり。今より馬鹿にならざる思慮すべきよ。とて賞美のあまり、即ち二百石の祿を増し與へられけり。それより山崎嘉右衛門を尊信し、學問を嗜まれ、後神公と謚せられしはこの中將の御事なり。
(卷二十四)

二 稻葉一徹の文學

稻葉伊豫守一徹、織田信長に従ひけれども、信長心解けず。數寄屋にて茶を賜はり、其の席にて刺殺すへしとの巧なり。一徹數寄屋に入る時、相伴の三人、挨拶に掛物の繪の讚を讀み給へといふ。これは韓退之



稻 葉 一 徹
京 都 隣 華 院 藏

の詩にて、

雲は秦嶺に横たはりて家何くにか在る。雪は藍關を擁して
馬前まへまず。

といふ句なり。一徹少し學問ありて讀みけるに、相伴其の故を問ふ。一徹大略子細を咄しければ、信長壁越にこれを聞き、つと走り出でて、一徹、荒勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞く處文學にも達せり。奇特の事、感ずる餘りに、實を語るべし。今日のもてなしは茶の湯にあらず。其方を刺殺さんとせし巧なり。相伴の三人皆懷劍を差したり。今日より永く我に従ひて謀を致されよ。ゆめノ、害心を止めたり。と言はれければ、三人の相伴懷より小脇差を取出す。

一徹平伏して、死罪を御免下され候事忝く候。私も内々今日殺さるべきにて候はんと察し申候へば、詮方なく是非一人相手を取
り申すべしと存じ、用意仕候。とて、是も懷劍を取出して信長に見せ
申しければ、信長いよゝゝ其の心掛を譽められけり。

女子用 東西遊記常山紀談鈔 終

昭和十三年十一月十六日 印刷
昭和十三年十一月十九日 發行
昭和十四年一月三十日 修正再版發行
昭和十六年十月二十八日 修正三版印刷
昭和十六年十月三十一日 修正三版發行

女子用 東西遊記常山紀談鈔

定價金三十八錢

編者 金子彦二郎

發行者 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原文

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社 石村勳



發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地 光

風

館

(電話) 神田三〇八七番
(振替口座) 東京三二七番

文部省檢定

高等女子學校國語教科書用 昭和十六年十一月十一日

文庫
0
941
5914

広島大学図書
2000035914

